

## XI-2 走る・投げる・捕る分科会

清水（小学校） 貴志・征矢（中学校） 長谷川・木村（大学） 長岡（中学校）（文責）

走る・投げる・捕る分科会では、陸上競技や他領域にもつながる走・跳・投の基本動作を習得する学習について、これまでの合同研究会でテーマとした「走る」（第5回）と「投げる」（第9回）を基にして、各学校の実態と実践を発表した。

### 1. 小学校の提案

小学校では、運動を丸ごと楽しませながら正しい動きを習得できるようにしたい。そして、様々なことをしながらも、全力疾走する経験を保障したい。それは、入学時に全力で走ることを経験したことがないような児童が見受けられるため、力を出しきって走る感覚をつかませて、走ることの楽しさ、気持ちよさを味わってもらいたいからである。そして、全力で競走することを楽しませたいと考える。投げることについては、正しい動作で卒業していくことを目標としている。投げることそのものを学習するのは低学年である。例えば、壁ぶつけゲームでは、投げることと捕ることは同一頻度として学ぶ機会を保障している。はしごドッジボールでは、教材の特性から、技能の低い児童においても投捕の機会を保障している。基本として、難しいことを言わないようにしている。

### 2. 中学校の提案

中学校では、生徒の関心や意欲、動機から、動くことそのものに集中させる教材設定を心掛けている。それは、目指す動作が意識しなくても自然とできるような場の設定であったり、用具を活用したりして、コツやポイントについて気付かせることを促すような教材を用意することである。また、技能の向上と理論的な事柄とを相互に関連させて理解を図るように学習を進めている。主に目に見える動作のポイントについて学ぶが、その動きを追求するための感覚についても、仲間と協力しながら、意識を向けられるようにしたい。投げることについては、基本動作に加えて、普段なかなか経験できない投てきを身近に感じてほしく、また生徒に投げることに對してより興味関心を抱いてもらいたく、様々な投てき物を用いて授業を展開している。その際には、安全・施設面を十分に考慮し、その上で体験させて、危険予測や回避するという状況判断ができる力を身に付させたいと考える。

### 3. 高等学校の提案

高等学校では、生徒に正しい動作を意識させて、理論的な事柄と自己の感覚とを関連させて理解を図っている。走跳投を教材とした指導の共通点として、自分の内面にある感覚に意識を向けさせて、イメージで自分の身体を動かすことを意図した授業を展開している。また、そして、お互いにフォームを評価し、動きを見る目を養わせている。陸上競技の中でもその特性は走・跳・投に大きく分けられる。さらにその分けられた中でも距離や跳躍方向・歩数、そして、投てきであれば投てき物が異なりそれに応じた投げ方になり、走跳投それぞれの種目の技術があり、各種目に応じて体力要素には特性がある。そのため、生徒にとっては、ある種目は苦手でも他の種目が得意であり、その生徒にとってはまたとない活躍の機会が保障できる。限られた時間ではあるが、短距離走や中長距離走、跳躍、投てきを体験させて、陸上競技全体を楽しませたいと考える。

### 4. フロアーの先生方との協議

- 児童生徒にとっての目的と必要感について。児童生徒にとって何のために投げるのかという目的が小学校や中学・高等学校で異なるのかどうか（他の領域に活かすために行うのか）。
- 小学校と中学・高等学校における学習目標の比較について。
- 「わかる」「かかわる」「できる」について、どのような展開ができるのか。
- 体育授業「陸上運動・陸上競技」の中で、心技体をどのように育てていくのか。中学・高等学校の授業は、技術指導に特化しているように見えることについて。